西遊旅譚序

余嘗遊於伊豆浴乎熱海而登于日金山山上有小山曰圓山前抱天城之峻後負函關之巖右富嶽之嶝〻左巨島之圜〻俯察衆山之嶄巍周覽羣嶼之崒屼立觀十邦坐辨八極實東海之絶勝也而天下之奇觀也乃探筺裝操筆硯將畧圖真形以示於同好及臨紙醮

筆若存若亡無由下毫於是釋筆喟然嘆曰吁嗟聞之古者善畫有舍筆松豈不信然哉頃聞友生江漢司馬氏齋其所著西遊旅譚諗余題其篇端開卷閲之則遊乎西邦之記也其所經過名都樂國神宇梵屋靡不采覽異言殊辭童謠歌謳靡不畢載間之以圖畫以便其觀覽曰試案其日金山圖崎嶇嵳峩堂

泱鬱紆髣髴若視其處恍惚若在其所
復亦嘆曰寫真之妙一至於斯乎余雖
未西遊也覽其所已觀而信其所未遊
昔者有為齊王畫者王問曰畫孰最難
最易曰犬馬最難鬼魅最易犬馬旦暮
在人之前不可類之故難鬼魅無形無
形者不見故易司馬氏是舉也演風俗
之美惡圖地形之險易皆考實按形之

事也豈特犬馬之難哉若夫使斯文遭輶軒之使以為奏籍亦必為洽見之奇書不刋之碩記也曰以是為序云

寛政甲寅五月戊申

福山　王太田方撰

西遊樵談叙

周ろ異者之撰之恠尤工図画生実當西

遊瓊蒲聡死者一戒慮之猶画其而見之寄

足乞様之君異同類之小冊以是之禾足逆

句之先而足説而足若校未能彿観やふの

友人陸氏輯之名曰西遊旅譚乃將以來問叙余
覧之則自山川草木禽獸以至樓臺宮室什
之美無不圖陰景不遺勇畫逸佳麗之境
無所不記噫乎難矣哉此乘之飛圖畫之雖非
瀛勝之雜記者亦之雅也其足之矣哉未之

具也今夫是詩詞之末無寄興之手則不能傳其
而見之於眼狀結耀照爍如法之妙是序跋之傳
無淵博之才不能使其所無之隱幽叙述所備
如此之洋溢深生使枯木發榮華各色之雜
也然果然者未安小其曰非施工者人謂乎過度

以淮佳之詩遍于海内蓋窮其神妙處也曰之而爲不隨於人之所爲難也果安必編温澤與余善

寛政甲寅冬五月

東橋　神孝吉敬撰

西遊旅譚巻之一

天明戊申の四月廿三日芝門を發して神奈川の驛ふいたる青木町より右の方山に登る熊野権現の宮又飯綱の社より夫より田畑をへて一本松とて小たかき所あり是よりすこし臨ば南蒼海をのぞむ海中に洲あり是天女の社あり其向ふハ野毛。本目。十二天の森などいへる東の方筑波山西の方富嶽に對すること甚の絶景なり

小田原の驛より右の方ふ入豆州熱海まで七里みち

山中にして左の方ハ海也大島初島見えて景色佳此山中大石多
石を切出ス（土肥又真鶴石ト云）近年伊豆御影石といふも出る所也三里餘
土肥村ニ至（田夫ノ家ニテ酒食ヲ商）それより熱海に至る本陣今井
半太夫方なり園中より温泉涌出する事昼夜に六度
甚熱湯にして烟氣立のほり此一村總て流れ温泉あまた
海中にもつき出る所あり夫より七八町東の方山路をこえ
て伊豆権現の社あり般若院といふ其山下の渚邊に飛
泉あり殊によき湯也病を治る効驗の事多し俗云鉄
氣ありて寒冷なりと俗是を称して権現の湯といふ

神奈川ヨリ南海ヲ望ム
野毛
洲間弁天
本目
熱海之圖

日金山より熱海より登る事五十町頂に地蔵堂丈六の銅仏なり僧房三軒ありて肉食妻帯の俗人の居所なり諸方深山にして田畑不作只萱小笹を生じて樹なし鹿猿狼多し夫より又登る事五町丸山あり其山径狭く一人を通ずべし爰に絶頂なれば四方を望み見る

伊豆國加茂郡日金頂所眺望之者十國五島自子至卯相模國武藏国安房國上總國自辰至申其國所隷之南五箇島及遠江國自酉至亥駿河国信濃國甲斐國

實に眺望四維に達するのみならず絶景なり画意に
妙なりといふとも經營甚しかるべし
溫泉より西南の方來乃社あり大貴巳命を祠る
總じて此邊大楠あり十五圍の樹を見る
熱海より三島へ往還の方へ越るに五里許り山中にして
人家なし二里ふ登峠の地名なる堂守肉食
妻帯其茅屋に老婆一人ありける白髪を乱し火を焚てゐ
かり傍ら見えず眞ょ寥々然として人語の響なき深山
幽谷也事問人もなければ夫より山を下りて軽井沢より出

所々なる遥(ハルカ)し人家(ジンカ)まゝ又ビンノ澤(サハ)平井邑郷(コウ)あるよし

三島清来へ出る此山中より天麻(テンマ)天南星(ナンセウ)の類多し

五里の山路(ヤマヂ)茅(カヤ)生じて大木なし故に箱根山是高山なり

伊豆天城(アマギ)山 五里 十四里人家なし大木多し熊住 最も佳景(カケイ・ヨキケシキ)あり

熱海より日金地蔵堂
まではのぼる事五十町初て
サイノ河原といふ所より
仰て富士山をのぞむ時に
五月七日絶頂積雪皚

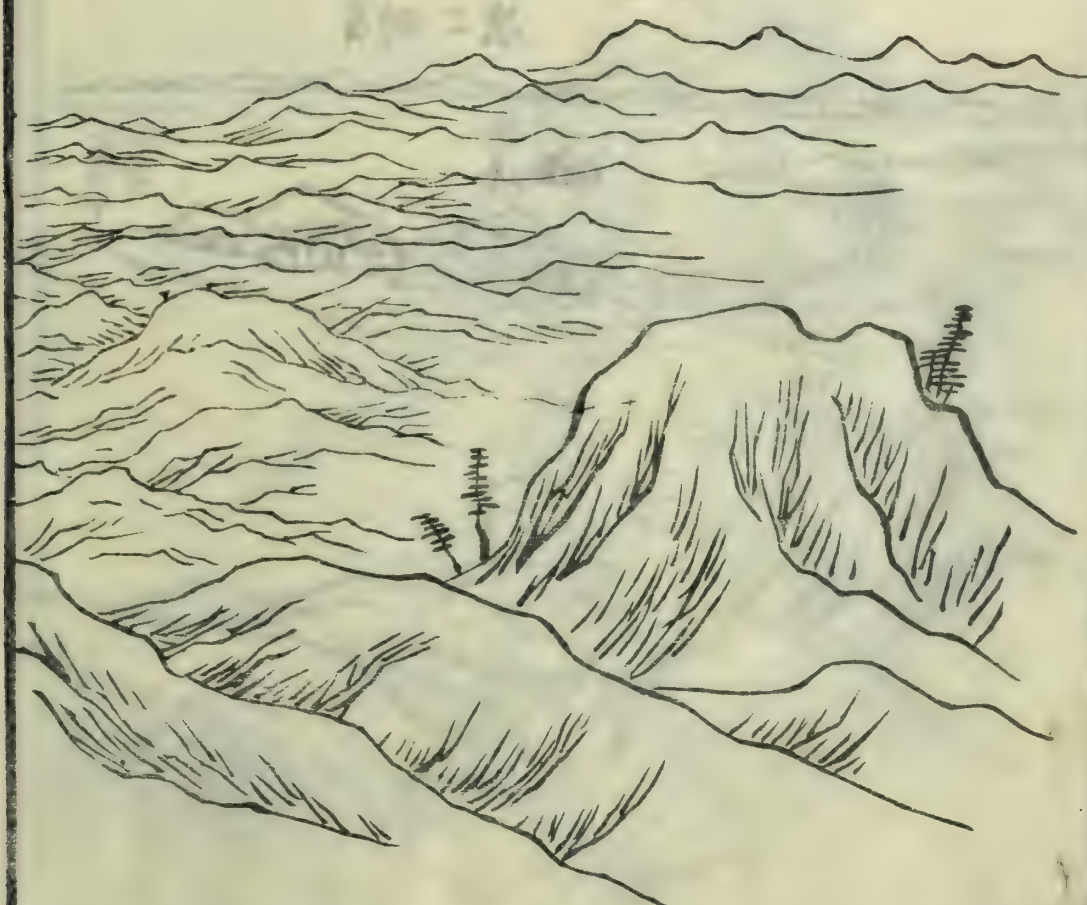
六角の堂ハ地蔵丈六の
生像にして銅仏なり
かやふきの草屋ハ僧舎
なり

日金山頂ハ丸山より南乃
方をとらむ
右ハ熱海網代下田海上
大島新島三宅島見
ゆる

日金山頂より
北の方をのそむ
冨士山左ハ足高
山右ハ二子山

日金山頂より
東の方を望

房州上總
江嶋
真なづる

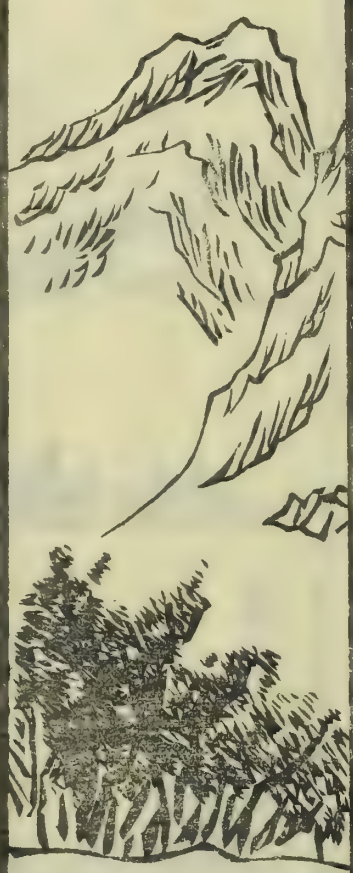
日金山頂より西の方を望
箱根山三島沼津狩野川
冨士川見ユル

三穂

江尻の駅より一里餘右の方山中に庵原といふ庵原河流れ来て出る其河源よりは北瀧と名飛泉あり岩石を廻て流れて激し甚の山林にして人物皆太布を着（太布ハ科トイヘル木皮ヲ以テ製ス）此一村紙を製して産業とす

庵原深山の婦女

駿府町数九十六町有皆板屋作 御城ハ府東の右にあり
四面山続て気候不順夏月忽ち変じて冷気まじりける
土俗曰冨士山より冷際の風を吹降す故なりとし又冬月
雪不降 風蘭石斛水仙自山谷に生ず 阿部川茶木地塗 油詩画ノ器物色々
多
浅間の祠山上にあり下し臨めば阿部川を見る
ミ
府中より東の方三里久能山にあり海をのぞみて山儀に
よじ石坂十七曲斜に登る左に五重の塔唐銅の鳥居
入て西面本社右に経蔵堂御廟は頂にあり此山を
下りて一里餘行て八部といふ十二景あり 往来ヨリ海ノ方一里餘 江尻ヨリ入ル

久能山之圖

覇王樹花
サボテンノハナ
花ノ色
カバ黄
同全圖

久能寺観音山ヨリ冨嶽ヲ望圖

伊豆天城山
鶴巻山
鷲頭山
箱根山
二子山
足柄山
足高山
観音山

昔雪舟遊于支那而所
圖富嶽景何乎望無知
者余登於駿陽矢部補
陀洛山上始觀之
寛政己酉春三月三日
寫於平安客館乃入
天覽
薩埵山
清見寺山
清水町
湊

八部龍華寺あり園中に大なる鐵覇王樹甚大樹なり

そこら花盛を讃し篤ることゝ移りて久能寺へ（久能山ニアラズ別なり江尻海テ）

石階をのぼりて觀音堂あり眺望すれば眼下に清水湊

人家千餘軒あり清水川流出て蒼海中三穂の松原富

に冨士を望む又難坂の薩埵峠由井沖津江尻清見寺

山右に足高山足柄山箱根山二子山伊豆鶴巻山鷲頭山

天城山見えて日本第一の風景なるべし

遠州掛川の驛より秋葉山へ行二里山路をこえて川を渡

又ゆく事二里川を越て森宿え（冨高アリ茶師多シ）夫より三里

一瀬と云所より此方川を越る事四十八瀬あり是より梺
まで三里ほど梺の前に瑞雲坂をとり瑞雲寺まより
小天龍川舟渡あり掛川を入て山ゝ嶮路大木多し松杉の茂し
山尤高し梺より山に登る事五十町唐銅の鳥居あり額金明
嶺山門に最勝閣本堂に大登山とあり堂ハ南面奉看板観
音を安置す鎮守南向権現の社あり寺は禅宗秋葉寺
と云是より三河国鳳来寺にゆく路也則寺の後の方坂
をおる事五十町戸倉と云所にある山坂多し半里ある
犀河舟渡天龍川の源也此辺総て米なし芋稗を

食事海なくして塩辛し甚の深山にて猿猪多し
夫より石井へ一里熊村へ二里此邊ハ殊に山林幽巌人煙寂
寞として物さびしき地也婦人ハ旅客の荷物を負て賃を
取男子よりハ女も海を見ず平地に人家の並立たる事
なし熊村より一里半加宇連峠に至る又行一里
半巣山村此所峨道転して峠あり遠州と三河の堺なり
を越或四十四曲坂を下り大野まで一里半此所ハ殊に深山也
大野ハ市街商家多し夫より板敷川を渡川の底岩
如板故に名とす夫より鳳来寺麓より五十町山にのぼる

行者越より一町余登るに岩石を攀て絶頂に至る
遠州海遥に見えて山も連て波の如しくるもの三四町山を
下て石階の上に権現の祠あり階下に薬師堂あり末社本
堂の後ろに多し右の方岩に登りて塔あり夫より石階を下る
事九町ほど麓に十二坊天台真言二派あり学頭天台なり
松高院其言に医王院の二坊也即ち麓に角屋町旅籠
多しこゝより瀧川へ出る渓の中を流るゝ川にて舟より
けるを錢亀村を瀧川とゆくて新城三里富商多し
夫より野田へ二里十六町大木村へ三里豊川なりかくても小

京高戸ヶ原家野ヶ原本野ヶ原をとほり 松原をゆく事
一里余 漸御由往還へ出る

熊村

此辺の農夫ハ舎を山の半に
作り此間一二軒 皆山の際に作
るゆへ山よりつねに猪猿多く
して畑をあらしぬれば廻り
に垣をゆひたる図なり
右しれ小家ハ猪番
小屋なり 日暮より
あかしぬれハ此熊村の
庄屋の宅に宿を取
かけて猪追声よすがら
夏日しハよるも眠らし

鳳来寺乃方重山
かぎりなしみゆる

勢州日永村ツンツク踊之圖
唱文句
ツンツン
ツンツク
境ヶ濱で
田を植る

お白(シラ)の果て
富士乃山
酒よつれしが泉酒(イツミザケ)
みじやろまい
はあうちふし
馬でやろうしい　山坂よ
車でやれうろ　道(ミチ)がなし
テテテツクツク　西の山から
あときりむして行てまる
それあときりひしさ
そらどにさしても手切(テギリ)みさしてて
美顔(メヽヨキ)小女郎まそさ
織(ヨラ)しよソウソウソウじ踊(オドリ)い
是山でし
・エイトコく

四日市盆踊
おんど唄(ウタ)年々
文句かはる

四日市諏訪明神祭
見物近郷より出る
挑灯
夜々の山かざり
男女見物する

勢州四日市の驛(ムマヤ)より薬師の前の宿日永(ヒナガ)村にて七
月十二日十四日十五日盆中三日踊りて小童(コドモ)或(アルヒハ)十七八の女子(ヲナゴ)
又廿歳(ハタチ)ばかりのものゝ白きさらしの手拭(テヌグヒ)をほう冠(カフリ)りして
腰(コシ)に扇(アフギ)をさして手をとりて輪となり唱(ウタフ)此一村に四町
より此踊を出して一町つゝ唱文句(ウタフモンク)ちがひぬ
七月十六日日永よりゆくこと三里余菰野(コモノ)といへる土方(ヒヂカタ)
侯(コウ)一萬石の領地(リヤウチ)に陣屋(ヂンヤ)あり市中(シチウ)一二町夫より東北の方に
半十余町にして河原あり川より五六十間常に水なし雨降(フレ)バ
漲(ミナギル)川源(センゲン)ハ二里余に湯の山青瀧(アヲタキ)と名ある瀧の流なり

廿日湯山より旅野より二里餘一里をして方一里程の原なり小笹お
ほし白真桔梗女郎花萩花盛也自是渓河越渡れば山中に入る
砂山にして砂流て山骨を顕し大石道路を塞ぐ又行事半里渓
流を出て岩石ごとく一面石頭を踏躍越て渓流甚深し
又行事四五町にて渓水を同じ躍越え左右悉く大山にして谷を
なしくあふるる山を挟て坂に屋舎を作る十軒許其半は湯
室也温泉出るの如し火を焚湯として浴する者多し此絶嶮嶇
やして大樹なし五穀不生此邊土なし皆小石より大石の
破て砕けたる如し

湯の山路
溪河乃圖
湯の山
全圖
冠が岳
湯源
湯室

此峠岩のあひだより出る花なり
岩石に傍(ソフ)て生じ大さ如圖

此山中夏月にも冷氣(レイキ)すゞし虫なども不生
蚊(カ)なし冬月ハ雪深くして
住居(スマヰ)がたし此所より近江國日(ヒ)
野(ノ)へ山越(ヤマコエ)四里許(バカリ)尤(モツトモ)人家(ジンカ)なし
谷流(タニガハ)をこゆる事六瀬(ロクセ)狼(オホカミ)
熊(クマ)多しとぞ
七月廿六日廿七日四日市諏訪(スハ)
明神の祭禮近郷(キンガウ)の者
見物に出る山(ヤマ)より

作又移りて出る此驛より京ニ属す東方の風俗なし婦人髪も風も皆京の流行に成りて殊ニ社に詣る婦女頭に帽子を被夏月ハ絽を以て製冬月ハ綿をもつる桑名より此邊家作専ら

亭

神戸(カンベ)ヘ行路 高岡川 鈴鹿ヨリ落ル

八月二日日永村を發(ハツ)して神戸(カンベ)に至(イタリ)三日
に神戸を出て白子観音堂（伊勢参宮道也）夫
より津なる藤堂侯（三十万石）の城下なり
比屋(ヒヲク)縦横(ジウワウ)に町續(ツヾケ)て富商(フシヤウ)多雲津川舟(フネ)
渡(ワタシ)此川は伊賀山より流(ナガレ)出るなり夫より又川を
二瀬(フタセ)にわたる此所松坂といふ人家つゞき
富商多(フシヤウオホシ)夫より行事四里小畑(ヲハタ)又新
茶屋といふ所を過て宮川の
舟渡(フナワタシ)あれども山田人家建續(タチツヾキ)繁昌(ハンジヤウ)

の一絶し外宮内宮の古市中
乃地なとに倡家多し

二見ノ浦
向ノ所
鳥羽浦島ヲ
見ユル

六日二見ヶ浦乃方。山田を發して
山中に入る事半里許にし
て川あり塩合川と云舟にて
渡る二見に至るなれより
その浦邊をめくりてゆけり
暫時の後ありて一村に入川あり
舟にて渡る小山をこえて
又渚邊に出る池の浦といふ
烏島見えて左りに松山

にのゝ志摩國鳥羽浦よ至る人家多く市街あり是まて四里また五十町一里あり此浦ハ西國の方乃船を掛関東の方へ渡る日和山登バ四方乃島々入江佳景也

池の浦之圖
飛島七ツ嶋
見ゆる東の方
なり

鳥羽
日より
山より
小の方
を望
島數多
見ゆる
景よし